

「歴史の空白」をうめる

鄒双氏の論文をはじめ読んでしたのは、「三〇年代の北京における錢稻孫像——日本人留學生の目を通して——」（『東アジア文化交渉研究』第五号二〇一二年二月）であった。評者は、三〇年代の中国人留學生の研究をしており、『関西大学学術リポジトリ』から、「発見」した。この論文で、初めて吉川幸次郎と錢稻孫の交遊を知り、一九五九年三月に吉川の奔走で錢稻孫訳の『漢訳万葉集選』を學術振興会から出版したことが、多くの日本からの留學生が、錢稻孫の世話になったこと、竹内好の北京留學時代の畏友楊聯陞のことにも触れられており、非常に蒙を啓かれた。また、同じ『関西大学学術リポジトリ』から、「日本占領下の北京における文化人——錢稻孫と周作人を中心に——」（<http://hdl.handle.net/10112/6343>）も読ませていただいた。その著者が、短い間に博士論文を纏め上げ、

絹川 浩敏

こうして出版されたことに敬意を表したい。

この本は以下のような三部構成となっている。

序論

第一部 戦前の錢稻孫と日本

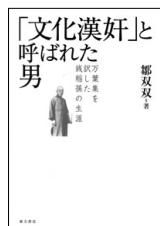
第二部 戦時中の翻訳活動と日本

第三部 戦時中の是非——「文化漢奸」の再検討

著者は、序論で「北京に踏み留まった翻訳家・錢稻孫を取り上げてその軌跡を追い、その検討を通じて、日本占領下の北京における一知識人の様相、文化交渉のあり方に光を当て、それによって日中文化史に新たな一章を加えることができる」とこの著書の目的を述べられている。結論

鄒双著

「文化漢奸」と呼ばれた男
——万葉集を訳した錢稻孫の生涯



A5判
296頁
東方書店
[本体 3000円 + 税]

から先に言えば、この目的は十分に達せられたといえよう。

評者は、以前に「竹内好・武田泰淳の友人顧鳳城について」(『季刊中国』二〇一一年一〇五号)を書いて、第三回大東亜文学者大会に出席した顧鳳城の三〇年代からのことを調べたことがある。顧鳳城は、三四年の春から夏の半年程度、竹内や武田と親しく交流した人物である。しかし、彼の軌跡は、当時の雑誌に掲載された文章からしか知ることができない。まったく研究の対象とはされてこなかったのである。

錢稻孫は、顧鳳城とはくらべるべくもない大物であり、周作人と並んで淪陷北京の二大「巨星」であるが、研究が進んでいなかったのは「漢奸」とされたからである。著者は解明すべき課題として、四点をあげる。

一、経歴について

二、翻訳活動の把握について

三、日本や日本人との関係について

四、いわゆる錢稻孫の「文化漢奸」について

「経歴について」は全編にわたって(さらに略年譜、作品目録が附録として収められている)、「翻訳活動の把握について」は第二部で、「日本や日本人との関係について」は、第一部第三章や第二部第八章で詳細に検討されている(さらに佐佐木信綱宛て書簡と岩波茂男宛て書簡が附録として収められている)。

貴重な資料発掘である)。そして、本書の白眉は「いわゆる錢稻孫の『文化漢奸』について」であろう。

本書の著述順とは逆になるが、まず、錢稻孫が、迷った末に、日本占領下の北京に残った理由として、三点あげている。「家庭の事情」。彼が、五人の息子と五人の娘を持ち、そのうちの五人を日本に留学させており、妻、年老いた母、そして一九三六年に亡くなった弟の一男三女も、彼が家長として責任を持って守らなければならない家庭環境にあった。さらに、年老いた母が北京に残りたいという強い意志を示したようだと、母親の影響も指摘している。

「手離しがたい書庫」。泉寿東文書庫の蔵書についてもアジア歴史資料センターから文献を探して出して、その状況を明らかにしている。

「対日認識」。青少年期から過ごした日本への特別な感情、「発達した日本文化」への信頼、「日本ファシチストは神経質的だが、僕から見ればほかの人はみな平和を愛するのだ。これはわれわれがはつきりと知らなければならない点だ」と考え、日本の「学術」と「政治」、「ファシチスト」と「普通の庶民」の相違を明確に区別したという。

そして、「文化漢奸」の「実」として、中華民国臨時政府が創設した新民学院で講師に就任し、『大阪毎日新聞』主催

の「更生中国文化建设座談会」に周作人と共に出席したこと、臨時政府が、旧国立北平、北京、清華、交通の四大学（の抜け殻）を整理、統合して設立した「国立北京大学」の秘書長、図書館長、学長に就任したこと、第一回と第三回の大東亜文学者大会に参加したことの三点をあげ、それぞれ「更生中国文化建设座談会」、「第一回大東亜文学者大会」、「第三回大東亜文学者大会」での発言を分析している。これら日本主催の会合への参加は、出席そのものが「通敵叛国」とみなされたからである。

「文化漢奸」の「虚」として、著者は、目加田誠の回想により、一九三三年ごろに中国人の反日運動を恨んだ目加田に向って、錢稻孫が「あなたのような人までそんなことをいうのですか。われわれ中国人の心をじゅうぶんにしていくれるはずのあなたが！」と涙を流しながら叫んだこと、またある宴会で酔っ払い「刀を出せ、早く出せ、おれを死なせてくれ」と暴れたということ、盧溝橋事件後の岸田国土との会話、一九四四年ごろの小林勇の「北京大学文学部長という要職にあるにもかかわらず、錢氏はまことに貧しくかつは寂しくそして日本に対して憤りをもっていた」という証言などから、錢稻孫が喜んで日本に協力したわけではなかったことを明らかにしている。

さらに、一九四二年のころに目加田誠に語ったという、「いま日本軍が中国に侵入してあばれているが、これはとなりの悪童がこちらの庭に入りこんで荒らしているようなもので、いまに疲れてひきあげるでしょう」「とうじ、北京に来ていたある日本の文化人が、わたし（目加田）に言ったことばに『チェン・ダオスンをとあさねば、北京大学は日本のものにならぬ』と。この人物は戦後日本で、民主主義の名家のような顔をして、いまも活躍しているが」という証言から、周作人の「片岡鉄兵の反対」（第二回大東亜文学者大会において片岡鉄兵が名指しは避けたものの周作人を「反動的な老作家」と攻撃し、中華の代表にこれに対する仮借なき闘争を呼びかけた）と同じような立場に錢稻孫がおかれていたことがわかる。

錢稻孫に対する「日本人の中国文化破壊にたいして身をもって防波堤となろうとしたこと」（目加田誠の評価）、「周作人を支えて荒廃せんとする学問の府を守り、占領者の日本人に対しても凜呼として齒に衣着せぬ心意気の文人だった」（中蘭英助の評価）は、著者の言うとおり再度確認すべきである。結論において、著者は、「錢稻孫の事例を通して、日中戦争期の北京における日中文学関係の一面面を提示できるところ」「日本占領下の北京における翻訳文学の位置づけ」「日本占領下の北京における知識人についての考察」と、本研究を

中国年鑑2014

◎5 月末刊行◎

中国研究所 編・発行

毎日新聞社 発売

1955 年創刊。現代中国に關する最新・基本情報満載の、一国を扱う珍しい年鑑。

B5 判 約 500 頁

価格：18,000 円＋税

◆特集＝見えてきた「中国の夢」——習近平政権の1年

米国と“新型大国関係”を構築し、“中国の夢”実現にむかつて着々と前進しながらも、格差縮小・民族問題等、課題山積する習近平体制下の中国。

“李コノミクス”や習近平政権の外交についても解説。

◆動向

政治、華人社会、対外関係、経済、対外経済、文化、社会

◆要覧・統計

国土と自然、人口、国のしくみ、軍事、少数民族、国民経済・国民生活、農業、工業、資源・エネルギー、交通運輸、対外経済、知的財産権、労働、暮らし、社会保障・医療制度、環境問題、NGO・NPO、教育、宗教ほか

◆資料

統計公報、重要文献、主要人事、2013 年日誌ほか

※お問い合わせ・ご予約は
中国研究所事務局まで

一般
社団法人 中国研究所

〒112-0012

東京都文京区大塚 6-22-18

TEL: 03-3947-8029

FAX: 03-3947-8039

e-mail: c-chuken@tcn-catv.ne.jp

URL: <http://www.chuken1946.or.jp>

位置づけている。そして錢稻孫研究の独自の意義として、錢稻孫が翻訳家であること、日中文化交流における翻訳の役割を強調している。そして、「政治と文化の狭間を生きた知識人」の「異民族支配下の普遍性を持った文化交流研究の一事例」とみなしている。そして、「何れにしても、われわれはこれらの人々を研究するにあたって、単なる事実を明らかにすることに安んじてはいけない。彼らの悲劇が招いた深層の理由を考えなければならない。その真因は勿論本人にもあるが、社会状況の転換や世界の動態の変化という大きな環境条件にも理由が潜んでいるであろう。本書では、こうした十分に検討しきれなかった諸問題の解明は今後の課題としたいが、ここでは政治と文化の狭間を生きた、もしくは生きざるを得なかった人々に対する関心を改めて喚起したい」と今後の決意

を語っている。評者が、「漢奸」とされた人物、あるいは日本軍占領地域にとどまり、そこで職業についていた人物に興味を持ったのは、先にあげた顧鳳城の他に、汪馥泉がいる（『売文社』としての大江書舗『季刊中国』二〇一四年一一六号）。汪馥泉は、陳望道と共に「大江書舗」という出版社を立ち上げた人物で、抗戦初期には、国民党側から『救亡日報』に加わり、後に孤島末期の上海に戻り、今日では有名になった五重スパイ袁殊の下で活動し、戦後は今日の吉林大学で教職につき、中華人民共和国では政治運動のなか迫害を受けた人物である。しかし、彼の資料は私の怠惰もあるがなかなか見つからなかった。「あとがき」にあるような「偶然」から短い期間に「漢奸」錢稻孫の資料を「足」でかせぎ、多くの人と出会い、附録に

あるような貴重な資料を公開されたことには、本当に頭が下がる思いである。

しかし、わたしにとって、この著作は読みやすいものではなかった点もある。錢稻孫評価に関わる重要な証言である目加田誠の文章が『目加田誠著作集』から、中藺英助のものが単行本からしかとられていない、それがいつ書かれたものかわからないのである。上記の本書の著述順とは逆に引用した部分も、やはり時間順に叙述すべきではなかったか。また、この著作は博士論文を出版したものではあるが、最初に引いたように、この本の元となる論文を著者はいくつか発表している。それをあとがきなどに記す配慮も欲しかった（第七章のみに初出論文にふれた注がある）。また、錢稻孫を周作人と同じような立場、つまり「巨星」であるがゆえに、「打倒・闘争の対象」とされた錢杏邨の北京文壇における位置づけの考察はやはり欲しいところである。すでに、岡田英樹氏が「淪陷時期北京文壇の台湾作家三銃士」（『よみがえる台湾文学』東方書店一九九五年）で一定解明しているが、錢稻孫の側から見た当時の北京文壇の状況の解明は欠かせないのではないか。しかし、錢杏邨自身は書いていないであろうから、ないものねだりであろうか。

この本にも何度か引用されている二〇〇〇年に出された

『交争する中国文学と日本文学』（杉野要吉編著、三元社）で、「歴史の空白」はかなり埋められた。陸柏年、山丁、梅娘、柳龍光、張我軍、関永吉、陳綿、沈啓无といった淪陷北京に残った文学者達の活動が明らかになった。さらに本書で、錢稻孫の軌跡も明らかになった。それは、中国文学と日本文学の研究者達の交流がもたらしたものであった。著者は、一身でその二つを兼ねたハイブリッドな研究者なのであろう。日本文学と朝鮮文学との交流も盛んになってきている。著者も結論の最後で引用しているので、意識されていることと思うが、「植民地の知識人」研究、「異民族支配下の普遍性を持った文化交渉研究」では、日本、中国、韓国そして台湾という地域研究の視野が欠かせない。『植民地文化研究』は今年一三号まで刊行されている。それぞれの地域研究の交流をより深めていきたい。

（きぬかわ・ひろとし 立命館大学）